

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 頼 衍宏

本論文「日本語時代の台湾短歌——結社を中心にした資料研究——」は、日本の植民地時代の台湾における短歌についての資料研究である。一八九五～一九四五年の台湾は日本の植民地であり、日本語を「国語」としていた。この日本語時代の台湾における日本語文学の正当な位置付けをめざして、本論文は短歌に目を向けたものである。

短歌は、台湾人を「教化」という点でも大きな役割を果たしたものであり、定着して、現在もなお台湾における創作活動は絶えていない。日本語とともに深くひろく浸透したといえる短歌は、日本語時代を考えるうえで必須不可欠であり、重要な問題であるが、その研究は十分になされていない。資料の整理もきちんと果されているとは言えないのである。そのために、日本語時代の短歌に関する発言が、たまたま目に付いたものによってなされたり、正確な情報に基かずにおこなわれたりすることがすくなくない。本論文は、その現状に鑑みて、基礎となるべき資料を調査・整理することをこころざしたものである。

本論文は、第一章「はじめに」、第二章「日本語時代における台湾歌壇の史的展開」、第三章「まとめとして」、の三章から構成される。第一章では、日本語時代の台湾短歌の研究の現状について、資料研究の決定的な不足をふりかえる。そして、短歌の場合、個人活動でなく、結社によって活動するというのが一般的だが、台湾においてもおなじであったことに顧みて、資料研究も結社を中心とするのが適切であることを確認する。第二章では、結社とその歌誌を逐一検討・調査してゆく。本論文の中心をなすのは、この調査であり、「資料研究」と題するゆえんである。第三章は、この調査によってあきらかにされえたことを確認し、問題の展望を与える。

本論文の核心は、第二章にある。特筆されるのは、資料研究としての意義である。ここで取り上げられた歌誌は、「新泉」、「にひ星」、「人形」、「十月」、「あらたま」、「泊夫藍」、「あじさゐ」、「行人」、「八雲」、「蜻蛉玉」、「海響」、「相思樹」、「朱轎」、「原生林」、「大タロコ」、「棕櫚竹」、「紅樹」、「台湾」、「がじゅまる」、「南台短歌」、「やまなみ」の二十一誌にのぼる。それによって台湾短歌を全体として見渡すことをはたしている。指針となったのは、『台湾万葉集』を編んだ孤逢万里の『「台湾万葉集」物語』（岩波ブックレット、一九九四年）であった（日本語時代を生きた歌人孤逢万里の同時代証言として類するものがない）が、これらの歌誌について、現存の確認（所蔵者・巻号）をはじめとして、結社の活動を発足から終焉まで、当時の新聞等を博搜して徹底的に調査することは、本論文によってはじめてなされたものである。

そのなかで、結社相互の関係や、日本本土の結社との関係をあきらかにし、台湾の人々

が、日本語時代にどのように短歌にかかわったかということ具体的に照らし出したのであった。誰が主宰し、どういう人たちが参加していたか、刊行の実際はどうかという事実関係を洗い出してゆくことを積み重ねて、台湾短歌の世界の実態にせまったのである。それによって、従来の論文等に見られた誤りを訂すところが多々あるのが、本論文のもっとも重要な功績である。たとえば、前掲の諸誌のなかでも、おおきな結社であった「あらたま」の創刊年月、主宰者について明確にしたことは、その一例である。また、教育の場において、「皇民化」をすすめる「教化」のなかで短歌の役割がおおきかったことを斎藤勇の足跡をつうじて具体的にあらわし出したことも注目される。

以上、本論文は、日本語時代の台湾短歌研究の資料的基礎を築いたものとして、たかく評価される。今後の研究はここからはじまるといって過言ではない。巻末に、参考文献が載せられているが、五十八ページにのぼるその文献一覧も資料的価値のたかいものである。なお生存する関係者へのインタビューがこころみられ、付載されているが、これも貴重な資料といえる。台湾の「日本語人」たちが高齢化したいま、この時期をはずしたら失われてしまうものが、本論文によってとりとめられたことの意味はきわめておおきい。

ただ、その資料的意義がたかく評価されるだけに、歌の引用などに正確さに欠けるところのあるのが惜まれるという指摘があった。また、これらの歌誌を調査してゆくなかで、さらに存在があきらかにされてきた歌誌を追究することの必要についても指摘があった。しかし、それによって本論文の価値を損なうものではないというのが、審査委員の一致した評価であった。

したがって、審査委員会は全員一致して、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。